



「風花草」へよう こそ



須条那智

ここは、喫茶「風花草」・この店には、いろいろな想いを抱えたお客様がやってきます。

ほら、きょうもまた、誰かがやってきたようです。

ドアにつけられているカウベルが、カランと軽やかに鳴りました。

暑い・・・・・・・・

溜息をついて、重い扉を開く。

人の気も知らぬげに、カラン、とカウベルの軽やかな音がして、カウンターのマスターが
「いらっしゃい」

と顔を上げた。

わたしは小さく頷くと、

「珈琲ね」

と呟いて、窓際の隅にあるいつもの席にどすん、と腰を下ろした。

うっとおしい梅雨の湿っぽさが残る天気。

どうしてこんなに疲れてるんだらう。

それも、どうしようもなくってわけじゃなく、ほんの少し心が溜息をついているような疲れ。

なんだかなあ・・・・・・・・

どのくらい、ぼおっとしていたのか、気がつくとマスターが黙ってテーブルの上に珈琲とアイスクリームを置くところだった。

「アイスクリーム・・・？」

不思議そうに呟くわたしに、マスターが軽くウインクするように両目をつぶる。

まるで、大丈夫、大丈夫って言ってくれるみたいに。

アイスクリームは甘く冷たく、喉を滑って心に落ちる。

たったそれだけのことなのに、なんだかほんの少し元気になったようで、我ながら現金だ。

「・・・・・・・・やっと笑った」

店を出るとき、そう言って笑ったマスターに、ちょっぴり胸がどきどきしたのは、きっとこの暑さのせい。

カラン、と軽やかなカウベルの音を聞きながら、すっかり軽くなった扉を開ける。

「ありがとうございました」

マスターの声に「またね」と手を振って外に出ると、見上げた空は梅雨とは思えないほどの夏空が輝いていた。

ここは、喫茶「風花草」。この店には、いろいろな想いを抱えたお客様がやってきます。

ほら、きょうもまた、誰かがやってきたようです。

ドアにつけられているカウベルが、カランと軽やかに鳴りました。

ココアのほんのり甘い香りが立ち上る。

ふんわりした泡の下にチョコレート色の美味しい飲み物が隠れているかと思うと、なんだかウキウキしてくる。

そう、思ってた・・・そう、昨日までは。

昨日、大好きな彼に言われた。

お子ちゃまのお前には、ココアがお似合いだな、って。

俺、ほんとはビターな珈琲の似合う女がタイプなんだ、ともね。

だったら、そう言ってくれれば良かったのに。

あなたがそう言うなら、わたし、珈琲の似合う女になるのに。

カラン、と扉を開けていつもの喫茶店に入る。カウンター越しにマスターが、

「いらっしやい」と笑った。

「今日はひとりかい？」

「うん・・・マスター、珈琲ちょうだい。思いっきりビターなの」

マスターはびっくりしたように目を丸くしたけれど、黙って珈琲を淹れてくれた。

サイフォンのコポコポという音がして、魔法のように水が吸い込まれ、珈琲ができあがる。

いつ見ても不思議。

しばらくして、「どうぞ」とマスターが目の前にカップを置いた。

香ばしい香りが立ち上る。見るからに苦そう・・・。

おそるおそる口をつける。

良い香り、と思ったのも束の間、あまりの苦さに涙が出そうになって、思わずむせる。

「悔しい・・・珈琲も飲めないなんて」

彼の嘲笑が聞こえてくる。やっぱり、お前はお子ちゃまだと。

あんまり悔しくて、目の前のカップが彼の顔に見えてきた。

「そんなに睨んだら、カップに穴が開くよ」

マスターはそういうと、カウンター越しに泡立てた生クリームがたっぷり入ったお皿を置いた。

「おまけだよ。苦いばかりが珈琲じゃないさ。入れてごらん」

もうどうにでもなれ、だ。

わたしは言われるままに珈琲に生クリームを落とした。

ゆっくりと生クリームが溶けていく。

マスターを見上げると、マスターは優しく頷いた。

その笑顔に押されるように、カップを取り上げ口をつける。

あ！

「美味しい・・・」

「ウィンナー珈琲だよ。珈琲にもいろいろあるんだ。苦いばかりじゃ味気ないだろ」

「苦いばかりじゃ・・・味気ない・・・？」

マスターが軽くウインクするように両目をつぶる。

「そうね・・・そうよね・・・。うん、ありがとう、マスター」

「それに、ほら」

マスターの指先をたどると、途方に暮れた顔の彼が、扉の前を行ったり来たりしている姿が見えた。

その手にあるのは缶入りのココア。

「彼、さっきからずっとああしているんだよ」

「なんで・・・」

私たちが見ているのに気がつかないのか、彼はしばらくそうしていたけれど、やがて何かを決意するかのようになり、手に持った缶ココアをぐいっと飲んだ。顔をしかめているのは、ココアが甘いせいだろうか。

甘い嫌いでなくせに、なにやってるんだか・・・。

「マスター」

マスターは、わかってるよ、というように、新しい珈琲を淹れ始めた。

わたしはそっと席を立つと、彼を迎えに行くべく、扉へと向かった。